

コメ ント

李 元 徳

皆さんこんにちは。韓国から参りました李と申します。本日はコメンテーターという大役を担わせていただくのですが、発表者の方々はこの分野の第一人者である上、私の指導教員もいらっしゃいますので、私がこの場でコメントするのに非常に負担を感じているところでございます。下手な日本語でコメントをするのは、私にはとても難しい課題なのですが、始めさせていただきます。本日のシンポジウムでは、日米関係のコンテクストというテーマが設定されていますので、日米関係をどのように理解すればよいのかということについて、アジアの中でも、とくに朝鮮半島の観点からいくつかポイントを挙げたいと思います。

一点目は、冷戦後の日本外交に対する評価についてです。極東からすると、日本の対米外交は、とくに冷戦後は成功裡に進められてきたと思います。しかし一方で、対アジア外交は必ずしもうまく進められてこなかったと思います。とくに小泉政権時代の対中、対韓を中心とする近隣外交を見た場合、ややバランスが取れていない部分があったのではないのでしょうか。もう少し具体的に言いますと、湾岸戦争のときに日本は130億ドルの国際貢献をしたにもかかわらず、アメリカから評価されませんでした。しかし小泉政権は、アメリカの反テロ政策に対して迅速な協力を打ち出したことにより、非常に早い段階でアメリカの評価を受けることができました。一方で韓国は、大量の軍隊をイラクへ派遣したにもかかわらず、それほど評価されませんでした。したがって、小泉さんのやり方は非常にうまくいったと思います。しかし、冷戦後の日本外交、とりわけ小泉外交は近隣との関係、とくに日中、日韓関係に大きな影を落としました。そうした問題は、今後安倍政権の大きな課題になるでしょう。

ところで、日本にとって日米同盟とアジア外交というのは、果たして二者択一的な問題なのか、つまり、ゼロサム的なものであるかということ、私は必ずしもそうではないと考えます。むしろ、対米外交とアジア外交の両方をうまく進めるのは可能だと思いますし、それを望みます。日本とその近隣関係がうまくいかないことは、日本だけの問題ではなく、アメリカも非常に懸念しています。北アジア戦略をうまく維持するためには、ある程度日中、日韓の協力が必要であるとアメリカは認識しているからです。

森本先生のレジュメでも触れられていましたが、日米同盟は今後アジアにおける英米同盟になるのかという問題を提起することができます。確かに日本は、アジア太平洋においていわゆる英米同盟を作りたいのだと思います。イギリスはその外交において、大西洋同盟をうまく構築した上、欧州の大陸、あるいは東欧、中近東の安定化にも積極的な働きかけを行っています。具体的にいうと、リビアに対して核の放棄を求めると、中近東の秩序作りにも積極的に取り組んでいます。しかし日本はというと、日米関係だけが重視されていて、北朝鮮問題など極東地域における問題にはあまり積極的に働きかけをしていないという見方ができると思います。

二つ目の問題提起として、久保先生のレジュメでは韓国における反米主義の話が少し出

ていました。それを拡大解釈すると、日本における韓国、とくにノムヒョン政権以後の対外政策に対する評価の問題と関連させて議論できると思います。日本だけでなくアメリカも、ノムヒョン政権はいわゆる左派ナショナリスト政権であって、日米同盟とは少し距離を置き、中国、ロシア、北朝鮮との関係を相対的に重視しているように思います。しかしこうした見方は、あまりにも誇張され、誤解されている部分が多いのではないかという気がしています。極端な場合、韓国は北朝鮮と手を結ぼうとしているのではないかという憶測まであるのですが、それは韓国の対外政策に対する理解不足だと思います。また、ノムヒョン政権がそのような誤解を生んだのは、対外政策における、いわゆる発信力の足りなさ、あるいは、外交においてのアマチュアリズムに原因があると考えられます。皆さんご存知のように、ノムヒョン政権に対する国民の支持率は非常に低いです。保守的なマスコミに囲まれ、韓国外交を批判する声が国内から発せられ、それが日本やアメリカのマスコミに伝えられている状況だと思います。

以前の政権とノムヒョン政権とは異なる部分がありますが、韓国の対外政策の基本的な枠組みが変わったわけではなく、今後どのような政権が登場しても、大きな変化は起こらないであろうと私は見ております。と言いますのも、韓国の対外政策の基本は、韓米同盟を維持すること、また、日本との友好関係を強化することだと思うからです。ただその場合に、近年急浮上している中国との関係が問題になります。日本とは違い、韓国には中国に対する伝統的な親近感が存在しています。また、北朝鮮との関係を重視した場合には、中国の役割を重視せざるを得ないという戦略的な側面もあります。さらに経済的にみても、韓国の貿易相手国として中国がトップになったという事実を踏まえれば、中国との間で友好関係を築くことは非常に重要だと思います。その意味で、韓国の対外政策は、伝統的ないわゆる海洋勢力と大陸勢力との狭間で、やむを得ずある程度の均衡をとっていかなくてはならない状況です。それは日本の地政学的な条件とは決定的に異なるところではないかと思っています。

第三点は、日韓関係のあり方についてです。とくに小泉政権になってから、様々な局面で日韓摩擦が生じ、深刻な問題になっています。日本がその対外政策においてアメリカとの同盟を重視しているとはいえ、日韓関係も一つの重要なポイントとなっていると思います。日韓関係は現在最悪の局面にあると言われていますが、それは短期的なものなのか、それとも長期的に継続するののかという問題を提起することが可能だと思います。それについて考えるためには次の二つを念頭に置くことが必要でしょう。

まず、日韓関係を規定する構造的な変化を前提に置く必要があります。90年代までの日韓関係を示す基底変数は、冷戦構造であったと思います。冷戦構造の中で日本と韓国は、いわゆる反共国家としての準同盟関係を保ってきていました。しかし冷戦構造の崩壊によって、日本と韓国の協力関係を促すような求心力は弱まってきたという点を指摘できます。それから、韓国の民主化も非常に重要な変数になっていますし、これからも大きな影響を及ぼすでしょう。また、日本も世代交代によって、政治の仕組みが大きく変わったといえます。さらに、中国が急浮上していくことによって、日韓関係を取り巻く構造的な環境が、冷戦時代と比べて完全に変わったという点も重要であると思います。このような構造的変化によってある程度日韓関係が弛緩されていかざるをえないのは否定できないでしょう。しかしながら、同時に日韓は相互に友好的な協力関係を支柱にしている部分も大いにある

でしょう。何といても、先ほどの日米関係のお話でもよく出たのですが、日韓は基本的な価値を共有しています。日韓のように自由民主主義、市場経済、あるいは市民社会の発達といった価値を共有している国は、アジアではまだ少ないと思います。それらは、冷戦後の構造的な変化にもかかわらず、日韓関係を強くする要素になると思います。

最後の四点目としては北朝鮮問題を取り上げたいです。最近では日本と韓国で政策のアプローチが非常に異なっていて、北朝鮮に対する見方には大きなズレが出ているのは事実であります。しかしよく考えてみると、長期的には北朝鮮への政策目標に関して日韓は合致している部分が多く多いと思います。両者は共に、北朝鮮の核ミサイルといった脅威をなくすこと、そしてそれがある程度実現した後には、北朝鮮の改革・解放を目標にしていると思われる。こうした点を踏まえると、北朝鮮政策に対する手段や方法、アプローチにおいての違いはあっても、長期的目標には日韓の間にそれほど差がないという点を指摘しておきたいと思えます。

また、北朝鮮問題に関連して、日本の役割の大きさについても少し考えたいと思えます。アメリカでは、北朝鮮のレジーム・チェンジを求めることが政策の基本になっていると思えます。それは先ほど山本先生がおっしゃったような民主平和論的な発想、あるいは、金正日政権とは妥協できないという姿勢によるのだと思われるのですが、日本の対北政策の目標は、必ずしもレジーム・チェンジとは言えません。当面の拉致問題、核、ミサイル問題の解決、それから経済制裁などの圧力を加えて、北朝鮮の変化を促すことだと思います。したがって、北朝鮮の体制が崩壊した場合、あるいはアメリカが軍事的な措置をとろうとした場合に、日本がどのような立場をとるべきかということは、非常に大きな問題になると思えます。地政学的な観点からいえば、アメリカにとって北朝鮮はマージナルな問題であって、本当の脅威とは考えていないでしょう。しかし日本と韓国にとっては、直接的な脅威になっており、もし北朝鮮の体制に急変が起きた場合には、難民問題ですとか、安全保障上の問題が生じる可能性が非常に大きいと思えます。そのような点を踏まえますと、北朝鮮に対する日本と韓国の姿勢というのは、それほど違わないと言えるのではないのでしょうか。もちろん異なっている部分もあるのですが、ある程度は信頼をもって話し合える部分が多いと私は見ております。以上です。